

Wcubic 便り



女性研究者シンポジウムを終えて

今年は温度差が大きな三寒四温ですが、春を知らせる梅、桃、桜は順に色づいており、卒業や新年度の節目に花を添えています。華道では、梅の直線的な枝ぶりを男性的、桃の丸みを帯びた枝ぶりを女性的として表現しますが、桃は曲げて形を作っても折れにくく、様々な姿となることができるのも、女性のたおやかな様子を表しているようです。これから新社会人となる方や環境が変わる方、新しい仕事に取り組む方もおられると思いますが、たおやかな活躍を期待しています。

さて、本年度も女性研究者シンポジウムでは、学生さん達の前向きで意欲ある姿勢を見ることができ、女子の可能性を確信いたしました。また、講演者の方々の様々な経験からの提言はこのシンポジウムしかでしか聞けない内容でした。皆様ありがとうございました。さらに講演してくれた学生さんにとって自己を見つめ、将来を考えるきっかけとなって欲しいという思いがありました。そこで、シンポジウムを終えての感想を頂きました。女性の権利を主張するシンポジウムではなくて、社会人と学生さん達が相互に刺激し、前進する力をもらうような効果があったとしたらシンポジウムを企画して良かったと感じます。参加された皆さんにとってはいかがでしたでしょうか？以下、皆さんからいただいた感想やエールです。

学生さんの声-----

「この度、九州工業大学で開催された女性研究者シンポジウムに参加し、講演をさせて頂きました。普段の学会発表とは一味違い、専門外の方々にどうしたら分かりやすく伝えられるか、自分の研究を理解して頂けるか、改めて自身の研究内容を見つめ直すことが出来ました。また、様々な専門分野で活躍されている他大学の女子学生の方や、企業で活躍されている女性研究者の方の講演を拝見させて頂き、いきいきとされている姿に感銘を受けました。大学院進学と同時に、多くの友人は就職してしまったため、同じ境遇の女性と話す機会が少なく、心細く思うことが何度もあり、くじけそうになったこともありました。しかし、講演会をはじめ懇談会で楽しそうに自身の研究テーマについて語られている姿や、家庭と研究を両立され、充実した日々を過ごされている方々の姿はとてまかつよく、私もこうなりたいと思いました。これから就職活動を迎えますが、今回の経験を糧にもう一度自分のキャリアを見つめ直し、10年後の自分も女性研究者として輝いた生活を築いてゆければと思います。

ます。」

「私は機能性食品の開発とその製品化を目指した研究を行っております。

女性研究者シンポジウムの学生セッションでは、発表に対し皆様から貴重なご意見を頂戴することができ、大変勉強になりました。また、研究発表だけでなく女性研究者ならではのお話を聞いたり、学生同士で交流したり、有意義な時間を過ごすことができました。その中で研究者の方々は、研究を続けたいという強い意志を持っていることがとても印象的でした。私も、身に付けた専門知識を活かした仕事を続けていけるように強い意思を持って社会に羽ばたきたいと思います。」

「私は、幅広く学んでいく中で、生物のもつ面白さに魅かれ、応用を目指した研究を行っております。研究に触れ、その難しさや楽しさが少しずつ分かるようになり、最近では研究者になりたいという思いが芽生えてきました。しかし、周りには男性の研究者が圧倒的に多く、自分が研究者になったらどんな生活を送るのか、女性として研究をやっているのかなど不安も多く感じていました。そんな中で今回、女性研究者シンポジウムに参加させていただき、研究発表だけでなく、結婚し出産した後の私生活の変化なども聞くことができ、とても貴重な経験となりました。特に、発表での高瀬先生の「女性のライフイベントも研究者もどっちも取るつもりでやっていけばいいと思うよ。」という言葉がとても印象に残っています。また、同年代の女子も研究を頑張っているということを知り、私もより一層頑張ろうと思いました。

今回、Wcubic の活動に参加させていただき、とても有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。」

「私は、現在の研究について、シンポジウムにて発表させて頂きました。自分の発表は、全く異なる分野の方々に対して、自分の研究をいかにわかり易く伝えるためにどのような構成で発表するかを検討する良い機会となりました。

講演では、研究はもちろんのこと、家事・育児との両立をこなしている女性研究者の方々に大きな感銘を受けました。また、バックグラウンドは違えど日々頑張る同世代の女子学生さんに刺激を受け、私も将来はこれまで学んできた化学の知識と経験を活かし社会に貢献できる女性エンジニアとして活躍したいと再認識致しました。独創的な発想・工夫・技術を磨くことによって何か一つでも人に負けないものを身に付けたいと思います。

4月から一般企業へ就職しますが、皆様から学んだ教訓を胸に新たな環境においても日々精進して参りたいと思います。

最後に、お声掛けして頂きました高瀬先生をはじめ、Wcubic 関係者の方々に深く感謝申し上げます。」

「私たちが身を置く研究領域・仕事をしていく業界では、女性が活躍している場が少なくないと感じています。だからでしょうか、正直なところ私たちは、研究を含め自らの活動の中で、女性という立場をあまり意識したことがありませんでした。根っこの部分では女性も男性も立場は変わらず、誰であろうと、自分のやりたいこと・実現したいことを信じ続けること、言い続けることで、それはゆっくりでも着実に実現していくのではないかと思います。けれどその反面、女性の立場ではまだまだ活動しにくい環境があることも確かです。一般的に言われていることではありますが、私たちにとってそのような課題について具体的に知る機会、考える機会がなかったことも事実です。

今回のシンポジウムに参加させていただいたことで、自分の領域とは違う領域で研究している方のお話はもちろん、普段聞くことのできない社会で働いていく上で直面する事柄などについてお話を伺うことができました。貴重な機会をいただきましたこと、改めまして御礼申し上げます。」

講演頂いた講師の方々の声-----

✚ 吉本則子先生 山口大学大学院医学系研究科(工学系)

この度の女性研究者シンポジウムはセミナーだけでなく参加者が交流できる時間が設けられており、女性ならではの楽しい時間がたくさんありました。高瀬先生の司会のもとに、和気あいあいとした雰囲気に参加者同士が密に情報交換でき、色々な人とお話しさせていただきました。

今回は研究の話よりも子育ての話をメインにさせていただきましたが、実は学生とあまりこのような話をしたことはありませんでした。それは、恵まれた環境の中で子育てをしており、恵まれた環境を当たり前だと思って話すまでもないことだと思ってたからなのですが、このシンポジウムをきっかけに 10 数年前に学内保育所の設立に奔走していた先輩父母の方々の姿を思い出しました。彼らは自分や自分の子供たちには間に合わないにも関わらず次の世代のために保育所設立に向けて様々な活動を行っていました。私自身は利用するだけ利用して何もして来なかったと現在、深く反省しております。

女性研究者をめぐる環境は子育てだけでなく、ここ数年でも目覚ましく変化しておりますが、Wcubic の皆さまのように長年、継続して活動されてきた成果が現れてきた結果ではないかと思います。10年後、20年後の女性研究者がより良い変化を感じられるようにWcubic のますますのご発展を祈念するとともに、私自身も微力ながら何かできることから始めて行きたいと思います。

✚ 矢崎エナジーシステム株式会社 柴田真紀子さん

初詣に行くと毎年必ずおみくじを引くのですが、今年のごくごく普通の「小吉」でした。ところが内容に目を通すと、「より良き世にする使命を持って生まれたのだから、勝手を言わず、一心不乱に働け。」とのこと。厳しいお言葉ではありますが、少し嬉しくもありました。

今回、皆さんの発表を聞いていて、研究職に携わる女性の多くが、誰かの役に立つこと、より良い未来を残すことを強く願っているのだということを改めて感じました。研究という仕事は、そのような思いに直結する仕事の一つだと私は考えています。研究が好きだという特性を持っているということは、即ち「より良き世にする使命を持って生まれた」ということに他ならないのかもしれませんが。

「ただ進歩した未来」ではなく「優しく、明るい未来」が訪れるように、より一層、女性の研究職者が活躍できるよう願っています。

今回はこのような機会を与えて頂き、本当にありがとうございました。

✚ 九州工業大学イノベーション推進機構 URA教授 倉田奈津子さん

シンポジウムに参加させていただいて、女子学生さんや女性研究者の方々の優秀さ、また如何に努力して頑張っておられるかを肌で感じました。女性研究者を取り巻く環境は昔より良くなってきているとはいえ本質的なところは同じと思いますが、何事も前向きに、笑顔と好奇心で乗り越えていかれませう、エールを送ります。

参加頂いた方々の声-----

✚ 鶴田隆治理事 九州工業大学大学院工学研究院

お休みを返上して熱心に、かつ楽しくシンポジウムに参加された様子を拝見しました。女性の皆さんが集われるシンポジウムへの参加は初めてでしたので、とても新鮮で有意義な体験でした。懇親会で直接お話できたことも良かったと思います。

大学では、リケジョ、男女共同参画という言葉聞くようになって少し時間が経ったような気がしますが、この4月より女性活躍推進法も施行されますし、いよいよ女性研究者の育成と活躍のための環境整備が重要になります。産業界においては、より大きな動きになることが期待できます。女性研究者のみならず、女性技術者としての活躍により、男性の視点や感性とは異なる新しいものづくりの世界が広がり、社会に幸福をもたらす活動が加速していくことを楽しみにしたいと思います。

✚ W³代表 吉本信子先生 山口大学大学院理工学研究科

九州工業大学で開催する「女性研究者シンポジウム」も 3 回目を迎えることができました。私は代表とは名ばかりで、高瀬先生をはじめとするW³事務局の先生方、九工大松永学長以下大学のスタッフの方々のおかげだと感謝しております。

シンポジウムに参加して毎回感じることですが、どの分野でも皆さんが自分の研究について自信を持って楽しそうに紹介してくださっているということです。聴いていて、元気が湧いてきます。一人でも多くの女子学生さんにこのようなシンポジウムで発表したり聴いたりする機会が与えられるよう、W³のメンバーで議論していきたいと思ひます。

*****編集後記 九州工業大学 高瀬聡子

皆さんの感想を頂いて分かったことは、女性の皆さんが「人の役に立ちたい」という意欲を強く持っているということでした。社会を構成する人として最も重要なモチベーションだと思います。個人が成長して社会が成長する、そのためには人と人が前向きに刺激しあうことが必要だと思います。本シンポジウムでの出会いがそのきっかけになれば嬉しいです。

自分と年もほぼ同じで2児の母のシングルマザーが著者の本を紹介します。社会人類学の研究者から経済ジャーナリストとなったジリアン・テットさんの最新刊「サイロ・エフェクト」です。アメリカの同時多発テロの時に駆け付けた消防車と救急車と警察車両の無線がお互いに通信ができない状況であることが、テロの現場で発覚したそうです。ニューヨーク市の行政のように専門化や効率化が進むと組織が細分化されサイロの中に閉じこもっているような状況になり、情報が共有されないために、リスクに気が付かないことが多々あり、日本のバブル破たん時の銀行倒産のようなことがおこると警鐘しています。このような細分化の弊害の解決策は、情報共有と組織間でコミュニケーションができるようにすること、としています。そうすれば一見無関係なデータどうしを関連付けることができ、新しい側面が浮かび上がる、というような内容です。ケンブリッジ大学で社会人類学の学位を取得した研究者から経済ジャーナリストになったという経歴から、経済学者ではできない見方ができているようです。経済偏重の社会感を人の動きに焦点を変えて考えることで、女性が活躍しやすい社会にすることができるのかもしれませんが、日本の社会に女性が多く進出すると縦割りのサイロ間の情報共有が進み、リスク回避が上手な社会になること間違いなしだと思います。人や社会は意識がある方に変わるものと思うので、意識もって行動していきたいですね。
